

石工品製造業

石の魅力を引き出す技能士の腕

7-19 岡田石材工業株式会社

日本有数の石材の町 庵治（あじ）

香川県の高松市の東、古くは源平合戦が行われた屋島の南部では、加工に適した「庵治石」と呼ばれる石材を豊かに産する。岡崎（愛知県）、真壁（茨城県）と並ぶ石材加工のメッカであるこの地域には、高品質な石材を扱う多くの加工業者、それを日本全国に卸す中間業者が立地、取材に向かう道の両側には巨石や灯籠、彫像などが並ぶ。また、イサム・ノグチを始めとした著名な彫刻家が作品を制作する場としても有名であり、最近では彫刻の大会が開催され、世界中から彫刻家が集まり、技を競った。

今回取材に応じてくれた岡田石材工業も、三代続く石材加工の会社である。現在の代表、岡田昌臣氏は同社を切り盛りしながら自ら1級石材施工技能士である。さらに今年度から始まった技能グランプリの「石工」部門に出場し、見事初優勝という輝かしい成績を収めている、まさに石材加工のトップレベルの技術を誇る企業が岡田石材工業である。

日常生活と石の関わりは、普段それほど意識されないが、例えば、建築物の床や壁面を覆う大理石などの石板や、街で見かける彫刻、そして先祖を祀る墓石など、要所要所に石材加工業者が加工した石材が用いられている。



山から切り出した巨大な石を加工していく。

意外に産地の合格者が少ない検定

岡田氏が持っている石材施工の職種は、加工・石積み・石張りの3つの作業に分かれている。加工は手作業により石を様々な形にしていく技術が問われる。また、石積みは石垣などの石を組む作業、石張りは建築物の床や壁に石材を敷設していく作業で、制限時間内にどれだけ正確な寸法で作業を行ったかが評価される。

「石材施工の技能検定は、県外では多く合格者がいるのに、庵治で持っている人はあまりいなかったんです。そもそも、石材施工という検定は、建築士の資格のように、資格を持っていないと建物を作れないというような種類

とは違って、これを持ってないと墓を作れないというわけではないのです。」と、石材施工の技能検定について岡田氏は話す。石材加工のメッカにも関わらず技能検定合格者が少ないということに危機を感じた岡田氏は技能検定合格を目指すことにしたという。

GP 優勝で仕事の幅が拡大

技能検定合格後、初めて開かれた技能グランプリで優勝したことで、会社の業務にも変化があったと岡田氏は話す。「やはり GP を取ってから仕事が変わりましたね。あるお寺さんから記念碑制作の仕事を依頼していただいたこともあります。仕事のボリュームも大きく、これまでとは全然違う仕事でしたね。」

一方、石工施工技能士となることのメリットとして、営業面でメリットがあったとも振り返る。

『なぜ高いのか』という問いに、品質の高さを示す手段として、技能検定合格があると思います。自分が創りだした作品の付加価値の高さを示すために技能検定合格は役に立っていると思います。また、技能検定の存在を知っているお客さんは、1級合格そのものを評価してくれます。」

石材の市場も例に漏れず、業況は厳しい。安価な中国産の石材が日本に輸入され、石材加工の会社の経営はどこも苦しくなっている。しかし、そのような状況の中だからこそ、自らの品質の高さを追及し、顧客に伝えていかなければならないと岡田氏は話す。「お墓は一生に一回の買い物。しかも一度建てたら何世紀も残ります。だからこそ職人の心のこもった商品を見て欲しいと思いますね。」



工場を案内してくれた岡田氏

岡田石材工業株式会社

- 業種：石工品製造業
- 住所：香川県高松市庵治町
- 代表者：岡田昌臣
- 設立：昭和25年
- 従業員：3人
- 技能士：1人

技能士へのインタビュー

岡田 昌臣氏（40 歳） 1 級石材施工技能士



石材加工のメッカを遍歴

岡田氏は、岡田石材工業の社長でもあるが、同時に 1 級技能検定に合格した技能士でもある。同氏は、高校卒業後、4 年間岡崎技術工学院に通い、日本でも三本の指に数えられる有数の石材加工地である岡崎の技術を学んだ。「岡崎、真壁、庵治と石材加工のメッカはいくつかあるんですが、石材の切り出し方や考え方はそれぞれの地域で異なるんですよ。庵治以外の地域の技術について学ぶことができたのはとても良かったと思いますね。」（岡田氏）。岡崎で石工の仕事について学ぶ中で 2 級に合格。庵治に戻って石材加工の仕事を始める。庵治では主に電動工具やエアー工具（圧縮空気ですり棒の先端を振動させて石材を加工する工具）を使って仕事をしてきた。しかし、中国の製品が市場に入ってくるにつれて、今の仕事に危機感を抱くようになったという。



石材加工の現場で使われている電動工具

「中国の商品を見ると、自分達の常識では考えられないような価格で販売されているんですよ。価格の安さに引けられて市場はどんどん中国産の商品で満たされていく。これは危ないな、という危機感をもちました。」

手作業でしかできない技を追い求めて

その危機感が岡田氏に 15 年振りに手で石を加工するという仕事の原点に立ち戻るきっかけとなった。手作業へ回帰していく中で、岡田氏は機械加工ではなかなか難しい加工に磨きをかけていった。「墓石をよく見ると分かるんですが、実は墓石には曲線や鋭い尖りといった、機械加工では難しい技術が多用されているんです。そういった部分は今でも手作業で作っています。最近の墓石はつるつると磨かれた表面のものが多くありますが、昔ながらの石特有のざらつきを残しながら曲面や尖りをつくっていくことの方が、技術的には難しいんですよ。」



石の表情を残しながら滑らかな曲面を作るのは至難の技

また、手で商品を創り上げていく中で石の個性を知ることでもでき

るようになってきたと岡田氏は話す。「石工という技能の魅力は、石一つ一つで、同じ仕上をしてもでき上がった商品の表情が異なる場所だと思います。同じたたき方をしても叩きの入り方が違うんですね。職人として、その石の違いをうまく考えながら活かしてあげることが腕の見せ所だと思います。叩き目の入り方が若干異なるから、この面はもうちょっと叩いてあげようとか、ここはちょっとやさしく叩いてあげようとか、そういったことを考えながら石に向き合っています。でき上がったときのイメージも重要です。きれいな面を前にむけてあげようとか、そういう気遣いが必要です。墓地などに行くと、この面がなぜ前面なのか、と疑問を思うこともある。石としてもこっちの方が見栄えがいいだろう、と思ってしまふんですね。こんな『石の気持ち』をどれだけ理解できるかがベテランと若手の差だと思います。」

石工の基本を思い出すために重要な手作業

手作業の重要性、石の個性を引き出してくれるきっかけになった技能検定。岡田氏は他にもメリットがあったと話す。「石工という仕事の基本を思い出すことができた、原点に戻れたというのが一番のメリットだと思いますが、若手の石工たちとのコミュニケーションの機会ができたのも技能検定を受検して良かったと思うことの 1 つです。」岡田氏は若手への技術指導を行っており、その「教える」という経験が逆に自分がこれまで忘れてきてしまっていた技術を思い出すきっかけにもなっているという。「ティーチング」という行為は、高度な技術の伝承、という側面だけでなく、自分が持っている技術の再認識、再「ラーニング」にもつながっているということである。

墓石以外に技術を応用して競争力を強化

岡田氏は経営者でありながらも自ら現場で石に相對する技能士でもあるがために、石材加工という業界の今後についても危機感を強く持っているが、一方で機会とも捉えているようだ。「特に墓石は一生に一度の買い物で、しかも一度建てたら何世紀も残るものですから、高い技術を持った技能士が丹精込めて作った商品にも競争力はあると思うんです。それに、自分の技能は墓石や石板以外にもいろいろな活用の仕方があると思っています。」

近い将来、石材加工の新しい道が岡田氏の腕によって示されるのかもしれない。